

Vol.19

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

◆ 目次 ◆

八幡に生きる	… 1
古墳時代の至宝	… 2
やわたしぜんだより	… 4
活かそう水辺	… 6
中村写真展を終えて	… 8
私の戦争体験	… 9
俳句でつながる	… 10
八幡 俳句歳時記	… 12

八幡に
生きる

昔ながらの製法で
素朴な和菓子を！

みささ堂

瀬戸口明信さん
幸子さん



八幡には和菓子屋さんが数多くあります。石清水八幡宮一ノ鳥居近くに店を構える「走井餅」、市民図書館前の「志ばん宗」、岸本の「亀屋芳邦」、美濃山の「はちまん」などです。今回は、六方焼や草餅、麦饅頭が店先に並ぶ「みささ堂」を紹介します。店は、

二ノ鳥居から南に下り、相槌神社の近くの平谷（ひらや）にあります。

夫の明信さん。お生れは伏見区深草で、長い間、鮮魚および塩干物を扱う仕事に従事し、大丸の管理部門を受け持つこともあったとのこと。幸子さんとは、京阪デパートの郡津支店

で知り合い八幡に暮らすようになります。

妻の幸子さん。八幡生まれの八幡育ち。近くの相槌神社は、45年ほど前から、刀剣の神様で一躍有名になりましたが、幸子さんが幼い頃は平谷地区の氏神さまのような存在で、世話役の方々が、地藏盆などを行い、その日には、金魚すくいの出店なども立ちました。八幡小学校に通い、近くの大谷川ではザリガニ釣りをしたり、木津川では水泳をしたりしました。祖父の代から続く「みささ堂」で、幸子さんは、時々和菓子作りを手伝ったとのこと。戦後のベビーブームと重なり、現在の馬場グランドにあった男山中学校では1クラス42人で1学年に8クラスもありました。

「みささ堂」では、平成22年（2010）に両親が相次いで亡くなり、店を閉めようかとも思っ

たそうです。しかし、道具類がそろっていることもあり、幸子さんが製菓衛生士の免状を持っていることもあって店を継ぐことを決心します。明信さんは既に退職しており、夫婦でやるだけやってみようかと決めました。明信さんが酒をやらず甘党であったことも大きいと笑います。二人の子どもは、「やめとい

た方がいい、でけへんわ」と両親の決心に半信半疑。明信さんは、レシピのようなものがあり、幸子さんにも教えてもらいながら試行錯誤を繰り返して、なんとかみささ堂の味を創ってきたと言います。

店に並ぶのは、六方焼と麦饅頭、草餅、団子など。季節になれば「水無月」もこしらえます。材料はいたってシンプル。小麦粉に水と砂糖などを混ぜ焼き上げ、石臼と杵でお餅にします。餡は小豆に砂糖・水飴をまぜて煮ますが、火加減が重要だとのこと。団子に色を出すための着色料は使いますが、防腐剤や保存料は一切使いません。ひいきにしてくれる常連客からは素朴な味で美味しいと言われ、それが励みになっています。

大谷川の清掃に取り組む八幡

ルネのメンバーには、休憩時のおやつにみささ堂の饅頭を差し入れる方がいて、それが楽しみだという仲間もいます。

関西テレビから取材を受け放映されたことがあります。六方焼が珍しいとのこと。京都市内の和菓子商でそれを扱っている店が1軒あるかないかとのこと。八幡宮に近いこともあって、お正月の参詣客が立ち寄ってくれますが、昔は、梨狩りの方たちも立ち寄ったとのこと。いつまでになるかわからないけど、健康である限り続けたいと目を細めます。

気がかりなことは？ と問うと、駅前がなんとなくならないのかと言います。「ツジトミ」が撤退し、京都銀行も移動する話があるとか。駅前が寂れる一方で、石清水八幡宮が国宝になったことからすれば寂しい限り顔を曇らせませす。写真は六方焼です。

（文・土井三郎）





八幡の銅鏡 (1)

濱田 博道

1、はじめに

弥生時代の祭器として使われた銅鐸は2世紀の終わり頃（3世紀初めとの説もある）、埋納あるいは破壊されたりして約500年間続いたその時代を終えます。代わって登場してくるのが鏡です。

鏡は日本では三種の神器（鏡・剣・勾玉）の一つに数えられ、古くから貴重視されました。特別な扱いを受けた器物、最高の宝物であり、それを所有することは権威の証でした。その多くは墳墓の副葬品として出土します。神社の御神体として祀られていたりもします。

鏡は最初、中国よりもたらされ、弥生時代中期の終わり頃から主として北部九州の墳墓で多く出土します。しかし、弥生時代後期から終末期にかけて（邪馬台国連合の時代）、その分布の中心は次第に近畿地方に移ってきます。3世紀半ば頃より、築造された古墳や遺跡で多くの鏡が出土します。今までの総数は全国で約6

000枚（下垣仁志『日本列島出土鏡集成』同成社）です。

2、八幡出土鏡について

八幡の古墳から約30枚の鏡が出土しています。その中には弥生時代後期（後漢・魏・呉・蜀の三国時代）に中国で作られた鏡があります。「卑弥呼の鏡」候補とされる鏡もあります。

それら八幡出土鏡の現在の所蔵分布をみると、3割強が関西圏で、その内訳は京都大学総合博物館（4）・奈良国立博物館（1）・泉屋博物館（2）・京都府埋蔵文化財調査研究センター（1）・八幡市教育委員会（2）です。その他の約3割は、東は東京国立博物館（7）・國學院大學博物館（1）から西は広島県の耕三寺博物館（1）まで広範囲にわたって分布しています〔○内は鏡所蔵枚数〕。それらはほとんどの所蔵機関で普段公開されていません（泉屋博物館は開館時展示）。残り4割強の鏡は記録や拓本は残っているものの、現物は「所在不明」です。

3、古墳時代について

まず、いつ頃からいつ頃までを古墳時代というか、考えておきたいと

思います。

古墳時代は奈良県桜井市に所在する箸墓古墳（はしむか前方後円墳、全長280m、3世紀半ば）の築造をもってはじまり、6世紀後半の橿原市に所在する五条野丸山古墳（見瀬丸山古墳ともいう。前方後円墳、全長318m。第29代欽明天皇の陵といわれる）頃までとの意見があります。定型化した（鍵穴のような形の）巨大前方後円墳は箸墓古墳に始まり、五条野丸山古墳を持つ終わるとされるからです。畿内ではこのようですが、地方によってはその後も前方後



↑八幡の主要古墳地図 ※

円墳が造られたりします。五条野丸山古墳築造以後、大王墓（天皇陵）は方墳や八角墳へと変化していきます。その時代を終末期といえます。ほぼ飛鳥時代にあたります。豪族の古墳築造にも規制がかかり小型化します。

また古墳時代をわかりやすく考えるために、その特徴から前期・中期・後期と分けることがあります。西暦で言えば、前期は3世紀半ば～4世紀末頃、中期は4世紀末～5世紀末、後期は6世紀初め～後半です。終末期は6世紀後半～7世紀半ば頃となります。

4、八幡の主要古墳

八幡には前方後円墳4基、前方後方墳1基、円墳(10数基)、方墳(4基)の他、形状のよくわからないものを合わせると計約20基の古墳があります。その他に斜面に横穴を掘って造る横穴墓が約三百基あります。そのうち、八幡の主要古墳をとりあげ、いつ、どこに造られているのかみていくことにしましょう。

①西車塚古墳

4世紀後半築造、八幡大芝、前方後円墳、全長約120m、八角堂周辺がその後円部、銅鏡5枚出土(唯一完形現存、木津川左岸最大の前方後円墳、桜公園下より撮影)



↑西車塚古墳(八幡大芝)

②東車塚古墳

4世紀末築造、八幡女郎花、前方後円墳、全長約94m、松花堂庭園の借景の小山が後円部の一部、前方部は消滅、銅鏡4枚出土

③石不動古墳

4世紀後半築造、八幡石不動、前方後円墳、全長88m、後円部にN T T電波塔が立つ、古墳所在地は立入禁止、銅鏡2枚出土



↑石不動古墳遠景(八幡石不動)
N T T電波塔下が古墳後円部

④美濃山王塚古墳

5世紀前半築造、美濃山大塚、帆立貝型前方後円墳、全長76m以上、古墳の上に宝珠院が建立されている(伝)、銅鏡13枚出土



↑美濃山王塚古墳(美濃山大塚)
右の建物は宝珠院

⑤ヒル塚古墳

4世紀後半築造、方墳、全長、一辺52m以上、三段築盛、銅鏡2枚出土



↑ヒル塚古墳(美濃山ヒル塚)
国道一号線北、家具店下が古墳

⑥八幡茶臼山古墳

4世紀前半、後半築造、男山笹谷、全長50m、前方後方墳、阿蘇溶結凝灰岩製石棺(黒石)出土、古墳発見時すでに盗掘されており、副葬品はごくわずか

⑦内里古墳

現在、古墳所在地を特定できていない、銅鏡2枚出土

他、東二子塚古墳、西二子塚古墳、西ノ口古墳で銅鏡各1枚出土

5、おわりに

今回のシリーズでは八幡の鏡と古墳に焦点を当て、八幡にはどんな古墳があるのか(あったのか)、どんな鏡が出土したのか、八幡の豪族はそれらをどうやって手に入れ、どんな活躍をしていたのか、古代史にロマンを駆り立てられながら一緒に考えてみたいと思います。

※「八幡の主要古墳地図」は、国土地理院電子地図を加工して濱田が作成した。

ぜわたしぜんだより

レンゲ畑のいきもの

No.9 山村 元秀

通勤途中の田んぼで今ではほとんど見られなくなったレンゲソウが咲いた田んぼがあります。今回はレンゲ畑の植物や昆虫について紹介します。

レンゲソウ(ゲンゲ)の花のしくみ

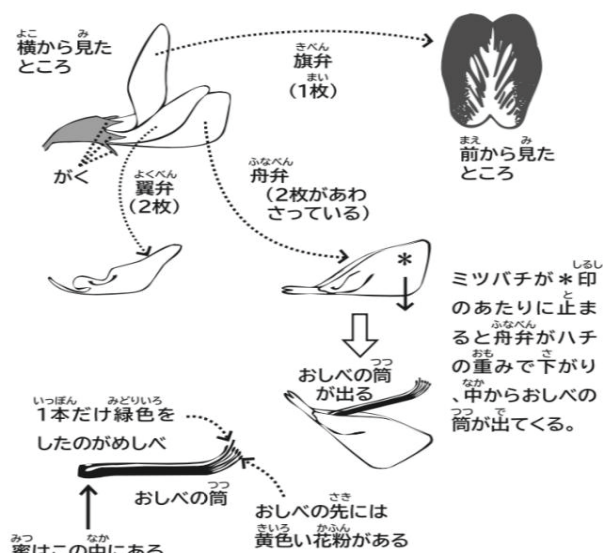
レンゲソウ(ゲンゲというのが標準和名)は中国原産の植物で、マメの仲間(マメ科)です。マメの仲間は花のつくりがよく似ています。図はレンゲソウの1個の花をばらしたものです。他にもカラスノエンドウ、カスマグサ、スズメノエンドウ、コメツブツメクサ、シロツメクサなどが同じマメの仲間によく似た花の形をしています。

なぜ田んぼにレンゲソウを植えるのか

植物が大きくなるには、水や光だけではなく、さまざまな栄養分が必要です。とくに、タンパク質をつくるもとになる窒素分はとても大事です。レンゲソウ、カラスノエンドウ、コメツブツメクサ、ダイズ、アズキ、エンドウ、ソラマメなどのマメ科の植物は根に根粒というツブをたくさんつけています。これが窒素分をつくる工場になっています。根粒の中には根粒菌という細菌が棲んでいて、空気の中にある窒素からアンモニア塩を、さらにタンパク質のもとになるアミノ酸を作っています。根粒菌が作ったアミノ酸をもらうことでマメ科の植物は窒素分たっぷりの葉や茎をつけます。大きくなったレンゲソウを、そのまま田んぼに混ぜ込んでやれば、栄養分がたくさん含まれた土になって、イネもよく育ちます。

マメ科の植物の多くは根粒菌と共生し、空気中の窒素をアンモニアに変える能力があります。この、空気中の窒素を動植物が利用できる形態に変換することを窒素固定と呼びます。

レンゲソウの1個の花のつくり

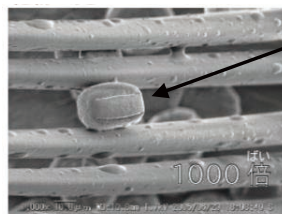
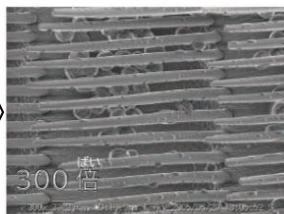
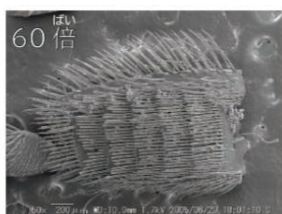


花粉や蜜の集め方

ミツバチはレンゲの花粉や蜜をどのように集めているのでしょうか。花粉だんごはミツバチの体重の半分ぐらい (40mg) あり、足の外側にある花粉ブラシ (くしの歯のように並んだ毛) を使って集めます。蜜は長くのびる口で吸って喉の奥にため、巣に戻って吐き出します。



電子顕微鏡で見ると



ブラシの間に花粉が見えています

一大阪自然史博物館「レンゲ畑のいきもの資料」公開版よりー

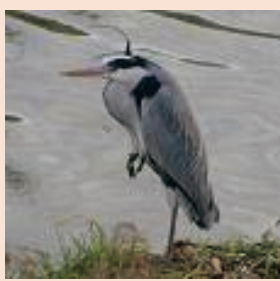
田んぼやレンゲ畑周辺の草花

マメ科 スズメノエンドウ カラスノエンドウ シロツメクサ コメツブツメクサ 	ナデシコ科 ゴマノハグサ科 オランダミミナグサ オオイヌノフグリ ハコベ タチイヌノフグリ 
アブラナ科 セイヨウカラシナ ナズナ タネツケバナ スカシタゴボウ 	シソ科 ムラサキ科 アカネ科 ホトケノザ キュウリグサ ヤエムグラ 
キク科 カンサイタンポポ オニタビラコ ノゲシ ハハコグサ 	イネ科 カズノコグサ スズメノテッポウ セトガヤ 

シラサギってどんな鳥？

市内の田んぼで代掻きが始まると、頭部がオレンジ色のアマサギがトラクターの後について歩く姿が見られるようになります。隣の城陽市の鳥はシラサギですが、シラサギとは全身白色のサギの総称で、主にコサギ・チュウサギ・ダイサギのことをさします。サギ類（このとり目サギ科）は日本で約 19 種類います。水田や水路、池や沼地でくらす水辺の鳥です。魚・カエル・甲殻類を食べます。



コサギ(全長 61cm)  クチバシが黒く、足指が黄色。浅瀬を静かに歩きかた足で水をかき回し小魚を追い出すしぐさを「コサギのダンス」というそうです。	チュウサギ(全長68cm)  夏はクチバシが黒く、目先は黄色、冬はクチバシが黄色で先端が黒色。水辺より草地を好みます。	ダイサギ(全長 90cm)  夏はクチバシと足が黒く目先は青色。冬はクチバシが黄色。じっと水面をにらみ、近くにきた魚をつかまえます。	アオサギ(全長 93cm)  日本で一番大きなサギ。淡く黒色がかった灰色。置物のようにほとんど動きませんが、獲物をとらえるときは瞬時に動きます。
--	---	---	--

活かそう水辺、つながろう流れ ～親水活動と防災教育～

NPO 法人日本水防災

普及センター理事長

澤井 健二

①川に親しむ

このシリーズの最初（『きずな』16号）に水辺の魅力について触れましたが、それを保全していくには、積極的に水辺に接することが重要です。水との接し方にはいろいろな側面がありますが、1991年にリバーフロント整備センターから出版された『川を楽しむ』には、実に多様な楽しみ方が紹介されています。

私は1948年に京都市北区で生まれ、近くに賀茂川があつていろいろな接し方を楽しみながら育ちましたが、その頃にはその恩恵にあまり気づいていませんでした。その後京都大学で河川工学を学び、防災研究所で20年余り研究者として河川に係った後、1993年に摂南大学で教鞭をとることになり、水理学や河川工学に加えて、「水辺の保全と活用」という教養特別講義を担当した時に『川を楽しむ』を教科書として使わせていただきました。その後、199

7年に市民サークル「淀川愛好会」を立ち上げ、1999年に「琵琶湖・淀川流域水環境交流会」を企画し、現在の「近畿水環境交流会」に発展していますが、それらの活動のキャッチフレーズになっているのが「活かそう水辺、つながろう流れ」です。

「活かそう水辺」は、人々が水辺に近づき活用するとともに、水辺の自然や生き物に目を向け、人間をも含む有機的な繋がりの命が活かされ続けることを願っています。「つながろう流れ」は、上下流の連携はもちろん、対岸や地域間の連携、分野や立場の異なる人々の連携、世代を超えた歴史・文化の継承への願いです。

②水難事故の防止

水辺は適切な保全と利用がなされると大変魅力的な空間ですが、全国において毎年多数の事故が生じており、その防止対策が重要です。

農林水産省や地方自治体では、水路やため池での水難事故防止のため、フェンス等を設置するとともに、子どもたちが水路やため池で遊ばないように、また、遊ばせないよう、呼びかけています。しかし、環境用水の導入目的からすれば、親水性の向上も大きな柱のひとつであり、どのよ

うにして安全と両立させるかが難しい課題です。

転落防止の観点からすれば、水際の傾斜を緩くして転落しにくくするとともに、万一転落しても、自力で這い上げられるよう、ステップを設けることも有効でしょう。また、構造物の周辺では、深掘れの生じることがありますが、そのような場所には近づかないよう、看板等による注意喚起も必要でしょう。最近、宇治川御幸橋下流の船着場傍らに立てられた看板には、「水辺で遊ぶ時には充分注意しましょう。」と書かれています。が、大変適切な表現だと思います。

さらに、日常における施設の安全点検を頻繁に行い、必要に応じて修繕、啓発看板の設置や安全指導などを行う必要があるでしょう。ただし、指導が行き過ぎて適切な利用までを妨げるのではないよう、注意が必要です。むしろ危険を認識した上で、適切な利用を促進するよう啓発していくことが望まれます。

子どもたちに、どのような時にどこが危険であるかを自ら判断できる能力を身につけさせることも重要であり、そのためには、水辺に接近することを禁止するのではなく、イベント等を通して、危険を克服する体

験をさせることも重要です。ただし、その場合には特に安全確保に留意して、経験者による指導や十分な人数による見守りが不可欠でしょう。

③防災教育と水文化の伝承

子どもたちに水辺の楽しさと怖さを学んでもらい、自らの命を守ってもらうとともに、それらの水文化をさらに次の世代に伝承していくためには、まず、子どもたちが水辺の体験を積むことが重要です。ただし、十分な知識を持たずに無防備に水辺に近づくと大変危険ですから、事前の学習も必要です。そこで、そのような学習の手助けとなるテキストがあると望ましいのですが、地域の実情に沿った適切なテキストを準備するのは容易なことではありません。

近年、インターネットを通じた情報の取得が飛躍的に向上し、広域の情報ネットワークも進みつつありますが、一方で、よりきめの細かいリアルな情報も必要です。例えば、町中の随所に見られる水害記念碑においても、子どもたちでも理解できるように、平易な言葉による解説を添えるなどの工夫が求められます。今後更なる国際化への対応には、日本語だけでなく、外国語併記による解

✓ 説も必要となるかもしれません。
 そのような準備をした上で、時折川を楽しむ体験と合わせて、そのテキストを用いた講座や見学会、体験会を催すことが有効でしょう。

NPO 法人日本水防災普及センターでは、それらのお手伝いができれば幸いです。

④ 八幡市における親水活動・

防災教育の普及事例と課題

八幡市における親水活動の場として、私の脳裏にまず浮かぶのは、1960年代前半まで御幸橋のたもとにあった八幡水泳場です。先に述べたように、私は京都市北区で生まれ育ちましたが、京都市内には水泳に適した浜がないため、八幡水泳場まで泳ぎに来たのを覚えています。その後、川の水質が悪化したのと、学校におけるプールの普及に伴ってこの水泳場は廃止されましたが、なんとか復活できないものかと願っています。木津川の水質は当時ほどには回復していませんが、かなり改善されており、もう少しの努力で、泳げる水準になることが期待されます。

一方、木津川では河床低下が顕著に進んでおり、河岸部に崖ができて、水際に近づきにくくなっています。



かつての八幡水泳場
 (八幡市ホームページより)

特に橋脚の周辺は深掘れが生じていますので、注意が必要です。生き物環境も非常に良いとは言えませんが、小魚を初め、ある程度の底生生物も見られ、子どもたちの水辺体験には絶好の場所に使われます。

水辺遊びのもう一つの側面として舟遊びがあります。御幸橋の周辺はこの意味でも大変魅力的です。木津川御幸橋の周辺は、水深が1m前後で、カヌーや筏に乗って遊ぶのに好適です。また、背割堤をはさんだ宇治川御幸橋の下流左岸には、船着場が設けられており、少し大きめの船の発着も容易です。しかも橋の上流側には「さくらであい館」があって休憩することができ、予約しておけば、学習室を利用できるなど、絶好の条件が整っています。

そこで、私が代表を務めている琵琶湖・淀川流域圏連携交流会（BYネット）では、御幸橋の周辺を親水活動と防災学習の拠点として活用したいと考え、2019年から毎月1回、さくらであい館の中に「琵琶湖・淀川流域圏情報交流コーナー」を設けるとともに、春夏秋冬の各季節に、水辺体験行事や講演会、野鳥観察会などを企画しています。

一方、街中における防災意識の普及を目指して、国土交通省では冊子体や電子媒体によるハザードマップのほかに、「まるとまちごとハザードマップ」が推進されており、八幡市内にも関連標識が数カ所設置されています。八幡市役所入口左方の柱には、目線高さに「想定浸水深6m」の標識が掲げられ、その上方の壁に想定浸水位線が示されていますが、



左が目線掲示の標識
 右が浸水位線標識
 (於、八幡市役所)

見やすさの点で改善が望まれます。浸水情報としては、「想定浸水深」以外に「実績浸水深」あるいは「実績浸水位」の表示も重要です。過去の被災記録は、古の災害文学『方丈記』（鴨長明著）を引き合いに出すまでもなく、単なる教訓にとどまらず、発生の時系列や空間的拡がりについての確率的情報を提示すると共に、避難行動等を含む被災者の体験談や言い伝えを広める効果があり、さらにその時の被害状況などについても追記があると、一層啓発効果があるでしょう。

その意味では、2019年から国土地理院発行の地図に記載されることになった自然災害伝承碑（地図記号Q）などをさらに普及させることが有効で、八幡市では、善法律寺にある室戸台風による犠牲者の慰霊塔が唯一それに掲載されています。



八幡市の自然災害伝承碑
 (於、善法律寺)

私の戦争体験

—中村哲写真展で
よみがえったこと

義間 和子

八幡市役所に用事で行ったおりに、文化センターで「中村哲写真展」を開催していることを知りました。新聞でもそのことを知っており、翌日行ってみることにしました。

「命と水」をテーマにしていることから幼いときの体験を思い出したからです。

昭和14年に生れた私は、2、3歳のころに家族とテニアン島にいました。父が「南洋興発(株)」という会社に勤めていて、サトウキビを栽培し、製糖の仕事に携わっていたのです。父はポナペ島で仕事をして、テニアン島へ移動になり、輸送船の中で招集令状が届き、父とは別れました。その後、母と2歳年上の姉、生れたばかりの妹の三人姉妹で社宅に暮らしていました。

昭和18年ごろになると米軍による空襲が激しくなりました。父は会社の同僚とニューギニアに行っており、残された母と幼い三人姉妹は、空襲の最中、リュックサックを背負いジャ

ングルの中をさまようのです。食べ物と言えば、蝸牛、木の実、イモ類です。やがて、洞窟の中で暮らすようになってきました。米軍にみつからないように、崖の途中にある洞窟にロープを伝って出入りするというものです。一番困ったことは水がないことです。洞窟の上から滴り落ちる水が唯一のものです。

幼い私の記憶の中で、洞窟から見上げた星空がきれいだったことを覚えていています。

洞窟には民間人だけでなく、日本兵もいました。着の身着のまま逃げてきたのです。日本兵は銃剣を突きつけて、子どもを泣かすなど言います。すぐ近くに迫ってきている米軍に見つからないようにとのことです。母は覚悟を決めていたようです。ダイナマイトを衣服に隠し持って、洞窟から離れて、親子で死のうと思っていたようです。実際に、手りゅう弾に火をつけ自ら死んでいった若い兵士もいました。

その時、姉が「死にたくない!」と走り出し、母は自分がしようとしていた愚かなことに気づいたようです。母はクリスチャンでした。

やがて、米軍が拡声器を使って「ソコノ者達早く出テクナサイ。食糧モ

水モ与エルカラ!」と呼びかけているのが聞こえてきました。片言の日本語でした。

母は、どうせ死ぬなら米軍の捕虜になり、幼い私たちを差し出す気持ちになつていたようです。

姉と私は水をむさぼるように飲みました。だが、妹はすでに息絶えていました。

栄養失調になると、足が立たず言葉も出ないことを知りました。そんな姿で私たちは米軍に保護され、捕虜収容所に連れて行かれたのです。戦争が終わり、2、3ヶ月過ぎていたのでしょうか。

テニアンは、広島と長崎に原爆を落とすために、ここから爆撃機が飛び立ったことです。南洋興発の敷地内に滑走路を造って飛ばしたということも後から聞きました。

しばらくの間、私たちは、テニアンの捕虜収容所で過ごしました。米軍の統制はよくとれていて、教員出身の日本兵には、教師として子どもたちに読み書きを教えさせ、女性たちには、何が得意かを聞き、食事や裁縫の手伝いをさせるのです。母は、ミシンができたので、繕い物の仕事をしました。

やがて、神奈川の浦賀に連れてこ

られ、その後鹿児島に移動させられました。鹿児島でもしばらく滞在しましたが、程なく、父母の生まれ故郷である徳之島に帰ってきたのです。

ニューギニアに渡っていた父は、会社の同僚と助け合つてその日その日を過ごしていたそうです。マラリアになる同僚もいて互いに看病しい、命をつないできたということでした。まるで、横井庄一さんや小野田さんのようにジャングルをさまよっていたのでしょうか。

やがて、父は戦争の終結を知り、東京にやってくるまで、引揚援助局の貼り紙で私たちが徳之島に帰っていることを知り、故郷に帰ってきました。父は、徳之島で田畑を譲ってもらい、農業に勤しむのでした。「正直に生きなさい」。それが父の口癖でした。母は、得意な裁縫をする傍ら、産婆さんの仕事にも携わり、多くの命を救いだしてきました。

左の写真は姉が長い間もっていた、日本海軍の紋章の入った薬缶です。



俳句でつながる

―八幡支援学校とだんだん句会

京都府立八幡支援学校

川本 久子
松本 直子

京都府立八幡支援学校は、平成22年に開校した、八幡市にある特別支援学校です。本校の特色として、同一敷地内に京都八幡高等学校南キャンパスが併設されており、様々な形で高等学校の生徒との日常的な交流を行っています。学校間の交流だけでなく、地域とのつながりを大切にし、地域の皆様との共同学習や地域社会と協働した学習を行い、本校の児童生徒にとってより確かな学びや、「共生社会の実現」に貢献してきました。

地域との交流授業の一環として、八幡市の俳句サークル「だんだん句会」の皆様をお招きし、去る12月1日に高等部福祉総合科3年生と、12月7日に中学部2年生と、国語の授業で御指導いただきました。

高等部福祉総合科3年生では、だんだん句会の皆様との交流を通し、俳句への興味や表現することの喜び

につなげればよいと考え、取り組みを進めました。

当日は、まずだんだん句会の方に講義をしていただき、俳句の基本を学びました。生徒達は興味深く聞いていました。その後、グループに分かれて校内を散策しました。落ち葉や雲の写真を撮りながら俳句の題材探しをしました。初めての人と話をするのは苦手で、緊張する生徒達ですが、だんだん句会の皆様とうまくリードしていただき、自然に会話をしながら校内を回ることができました。



教室に戻ってよいよい俳句づくり。「何書こう?」「わからへん」と戸惑っていた生徒も句会の皆様のアドバイスで言葉を出していききました。

「もっとこうしたら俳句らしくなるよ」「言葉の意味が重なっているから違う言葉を考えよう」等、俳句を究めておられる皆様の助言を素直に聞き、俳句を詠むことができました。

だんだん句会の皆様も一緒に俳句を詠んでくださり、最後はみんなで鑑賞会をしました。



生徒の俳句のよいところをたくさん褒めていただき、まんざらでもない自分を感じ、自信となりました。卒業後は社会に出る生徒達。この取り組みでいろいろな人とコミュニケーションを取ることの楽しさや、表現することの喜びを感じられたと思います。



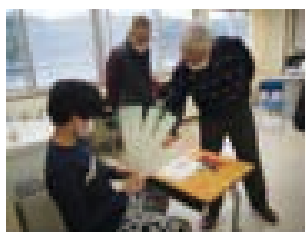
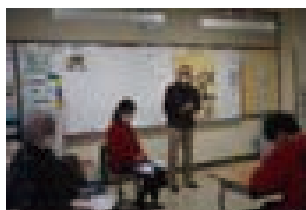
中学部2年生では、昨年度に続いて2回目の交流授業ということもあり、生徒達はとても楽しみにしていました。前回は「秋」というテーマで俳句をつくり、今回は「冬」をテ

マに俳句をつくることになりました。俳句をつくる前に「冬」についてイメージづくりをしました。たくさん冬の冬にまつわる言葉が出てきて、そこから連想ゲームのように、いろいろな話が膨らみました。「冬」はみんなが大好きな季節行事が多いことや、美味しい食べ物がたくさんあるということ、イメージがつくりやすかったようです。



交流当日は、前回ほど緊張した様子はありませんでしたが、少しそわそわして待ち遠しい様子でした。

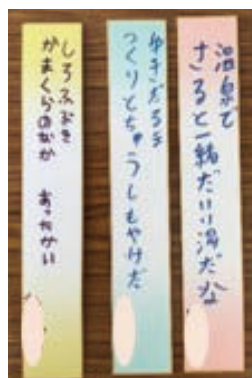
授業が始まり、句会の皆様の俳句が紹介されると、「すごいな」と感心していました。



「冬」というテーマは話が弾みやすく、句会の皆様と生徒の会話が多く生まれました。上手に話をつなげてくださり、生徒も安心して自分の思いを伝えることができました。



なかなか言葉が出てこなかった生徒も、自分のイメージを伝えると、句会の方が一緒に考えてくださり、自分の思いを五・七・五の言葉としてつなげることができました。



「俳句名人」の方々に褒めてもらおうと、生徒達は得意そうな様子で、とても嬉しそうな表情をしていました。教えてもらう言葉一つひとつを大きく頷いて聞いていました。それらの言葉を大切に受け取っている様子を見て、やはり地域の方と接することは生徒達にとって、とても貴重な経験になると改めて感じました。



日頃は発表することが苦手な生徒も、この日は全員が自分のつくった俳句をみんなの前で発表することができました。自分の作品を聞いてもらいたいという前向きな気持ちが生まれたからだと感じました。

一生懸命言葉を探し、俳句をつくらうとする生徒達を句会の皆様が見守ってくくださり、温かい言葉をたくさんかけてくださることで、生徒達は自信をもつことができました。この取り組みが終わってから、生徒達から「また一緒に俳句をつくりたい!」という声が聞かれました。生徒達の学びに御協力をいただき、そ

して貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

『きずな』の文芸

《俳句》

白梅の開花とともに金メダル
うぐいすの初鳴きまだか老夫婦
黄の蝶が黄花黄花へ飛び回り

—— やすお

ジャスミンの窓あかりして夢始む
さりさりと母の髪切る春彼岸
昨日へは帰れぬ夜の観覧車

—— 萩の葉

この空のどこに夫の座春の星
遠足の声のぼりゆく天主閣
先人の夢の水路や若葉映ゆ

—— 淑子

支援学校の夢みせし子等椿の芽
浦浦に女の一生古雛
暖かや拳式のチャペル豊席

—— 千恵

喪正月ホームに母を放牧す
白鳥三千羽みなこれ爆撃機
山笑う山食いたいと母の言う

—— 信

若冲の涅槃図囲み葱蕪
ふるへつつ生まれ出るやしやぼん玉
認知症検査終了木瓜の花

—— せい子

春近し廃寺の奥水ながる
花冷えに拍車をかけるコロナかな
春日あび画面のなかで旅をする

—— 瑞鶴

薄氷や草鞋の僧の列に会ふ
菜の花や当尾の里の石仏
春風や加茂川沿ひを一万歩

—— 亜矢

ティッシュにてその目覆わん雛納め
春芝居紙衣が映えるやつし芸
義経が高々飛ぶや春の潮

—— 幸水

息白し若き杜氏の怒眉
切株に腰を下せば初筏
朱の鳥居春の陽透かす稲荷山

—— 重悟

《川柳》

今さつきそこに置いたが見当たらず
うまい!しか言わぬ食レポいらいらし
葉を食うか一瞬迷う桜餅

—— えつ

《短歌》

くれなゐにとらわれゆける花のよる
まつりの記憶に始まりし春
海風が夾竹桃をそよがせて

午後6の仏文しばしのアンニユイ
—— 萩の葉

八幡俳句歳時記 15

菩提寺「須磨寺」と句碑

小河洋二

須磨という土地は、皆さんご承知のように、古くから歌枕の地として多くの詩歌や物語に登場してきただけでなく、源平合戦の舞台にもなるなど、多くの歴史が香る土地である。しかし、阪神大震災では多くの家屋が倒壊し、多くの被災者を生んだ。

なお、山側には鉄枌山、鉢伏山、須磨離宮公園（終戦までは離宮として一般人の立ち入り禁止）があり、私の通った小学校は離宮へ辿る坂道の途中にあり、天皇家の人々が御幸の際は、学校の前に整列してお迎えした記憶がある。黙祷をして何も見ることはなかったが、馬車の輪の音だけが聞こえた。

その離宮公園へ半キロ程の所に須磨寺があり、須磨寺を1キロ程下ると、綱敷天満宮がある。この1キロ程の道は、お大師さん（弘法大師・空海）と天神さん（菅原道真公）が、両方とも「学問・智慧」に縁が深い人物であること

から、参詣道に「智恵の道」という愛称がつけられ、綱敷天満宮は道真公が九州筑前国太宰府へ左遷される道中に休息した地に祀られている。（小学校の頃には子供神輿も出て、賑やかな祭りが執り行われ、神輿を担いだ記憶がある）。

さて、話を須磨寺に戻すこととする。

◆正岡子規と須磨

従軍記者として赴いた日清戦争からの帰国の途中に、持病の結核が悪化し、「須磨保養院」で療養することになる。明治28年の7月から8月にかけてのこの、子規は、須磨を散策し、須磨寺へも足を延ばしていたようだ。

六月と綺麗な風の吹くことよ

水毎月の須磨の緑と御らんぜよ

暁や白帆過ぎ行く蚊帳の外

「須磨保養院」は今の須磨浦公園の近くににあったようで、「結核保養所」は長く存在していたことを記憶している。特に、松並木の連なる海岸線には「保養所」が多く設置されていた。

また、子規が須磨寺を詠んだ句も、いくつもある。

須磨寺に取りつく迄の暑き哉

二文投げて寺に縁借る涼みかな

御仏も扉とあけて涼みかな

秋風や平家市ふ経の声

◆尾崎放哉と須磨寺

種田山頭火とともに自由律俳人の双壁として知られる尾崎放哉は、大正13年6月1日から翌14年3月までの9ヶ月を須磨寺大師堂の堂守として過ごした。放哉が39歳から40歳のときのこと、大師堂で腕組みをしている写真も残っている。須磨寺を出てから、福井県小浜市の常光寺を経て、小豆島の西光寺の院南郷庵に入り、大正15年4月に亡くなる。

皆さんも、放哉が小豆島で他界したことはご存知だが、須磨寺で寺男として過ごしたことは、ご存知ないと思う。大師堂の前に、尾崎放哉の句碑があり、直ぐに判る。

あすは雨らしい青葉の中の堂と閉める

一日物云はず蝶の影さす

たった一人になりきって夕空

何か寂しさの宿る句で、尾崎放哉の晩年が見えるようである。

境内には、他にも多くの句碑がある。

小河六平

海の色幾度わりして梅雨の須磨

小河六平は俳誌「須磨千鳥」創刊者。

学生の頃、六平氏の下でアルバイトを

していた。夏期の海の家への食料卸であるが、種々思い出も残っている。小河六平は、神戸市会議員や漁業組合長等の要職にも就いていた。

五十嵐播水 句碑

香煙にふりこむ雪や初大師

伊丹三樹彦 句碑

甘酒に いま存命の 一本書

長き夜の楽器かたまりいて鳴らす

伊丹三樹彦句碑は、黒御影石に彫られて弁慶の大鐘堂の前に大きく構えている。

句集「延命水」より

妻へ買ふ櫓さびしき十二月 洋二

延命水ふふめば須磨の涅槃寺 々

山門と入らば浄土や花の昼 々

須磨寺の東側には大きな池が広がる。昔は池にボートが浮かび、池を取り囲むように桜が風情を醸していた。池の東側には、料理旅館が並び花見の宴の声も聞こえてきたが、今は廃業して寂しい景を見せている。

延命の水存分に暮洗ふ 洋二

蛤になれぬ雀は寺へ来て 々

放哉への手向け

朧夜や寺の猫鳴く放哉忌 々

協賛金のご協力をお願いします

(郵) 00940-8-196292 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会
(銀) 京都銀行男山支店 普通預金 4165224 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会